地理的な見方や考え方

村田正夫

大学を出て、高校の教員になって25年日になる。しかし、いまだに地理という科目で何を教えるべきなのか、よく分からない。小中高の学校教育は、文部省が告示する「学習指導要領」なるものによって、各科目ではこういうことを教えなさい、ということが示されている。各科目だけではなく、例の卒業式・入学式の「日の丸・君が代」をあげろ、歌えという、自殺者まで出したあのこともこれに書かれてある。教科書は、この学習指導要領に従って書かれねばならない。教科書検定というやつで、従っていなければ検定不合格とされ、教科書にはできない。私は、この学習指導要領は、よく目を通す。この３月（1999年）には、2003年から適用される高等学校の新しい学習指導要領が告示された。それによると、地理教育の目標は「現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い」というものであるらしい。これが、私にはさっぱり分からない。地理的認識て、何や。位置関係の認識のことか？地理的な見方や考え方て何や？となる。……おれは大学でなに勉強しとったんや。確か、私が卒業する時の卒業論文の発表会の夜、そう予餞会の酒席で、ある教授に言われた。「君の卒業論文は地理の論文としては問題ですねえ。」と。「どこがやねん。」と内心は思ってたけれど、あの頃からやっぱり、地理的な見方や考え方は苦手だったらしい。恐らく、今の僕の授業ではその先生に言われるだろう。「君の授業は地理じゃありませんよ。」と。要するに、地理的な見方や考え方とくると、私はさっぱり分からない。教師がこれだから、私に教わる高校生は大変だろうと思う。

数年前、文部省の一室で、当時の教科書調査官のＳ先生から、地理とは、を教わったことがある。今はどっかの大学の先生だ。地理で扱う事象は「本質的に同じ事が、地域によって現れ方が違う現象、逆に、似たように見える現象であっても、本質的に違うという現象」であると。その時私は考えた。そのためには本質的に同じとか違うとかいうことが、あらかじめ先行して分かっている必要があるのではないか。その本質にたどり着くのは、地理的な見方や考え方でできるのか。地理的な見方や考え方についても、同じくＳ先生がおっしゃったのであるが、たしか「比較の方法」とか「分布における特徴に注目」とかを強調されたように記憶しているが、あまり覚えていない。ともかく納得はしていなかった。比較の方法なんて、どんな学問でもありうるわけで、特別に地理だけのもんやないやないか、などと思った記憶がある。ともかく地理的な見方や考え方はいまだ不明である。

もう30年程前、1970年に告示された学習指導要領は私にとっては明快である。「……地理的事象を科学的、総合的に探求していこうとする態度とそれに必要な能力を養う。」とある。なぜ明快か。地理的な見方や考え方がないからだ。そう、地理的事象ならまだ分かる。先のＳ先生があげた事象もそうだろうし、分布に特徴のある事象もそうだろう。それを対象にして、科学的に探求しろ、と言ってるのだから、それこそ経済学や政治学など、地理という名にこだわることなく、社会科学と呼ばれる

学問を学びながら地理的事象を探求すればよい。特に、経済学の知識や考え方は役に立ちそうだ。実際やるとなると大変だが、理屈は簡単だ。「地理的とは、事象をさすのであって、方法や考え方をさしているのではない。」、これが1970年の学習指導要領の思想だった。いつ頃から、地理的な見方や考え方が登場したのだろうか。その後の学習指導要領を追ってみると、1978年の学習指導要領は「地理的な認識を養う」とある。ここで、認識の方法に「地理的」があることになった。そして、1989年の学習指導要領から「地理的な見方や考え方を培い」があらわれる。そして、これらは今年（1999年）の新しい学習指導要領に、すべて引き継がれたのである。

私が大学にいた1970年代の前半は、まだ大学紛争の残りカスのようなものがあって、教養部の定期試験などはまともにあったことがなかった。試験期間になると、いつもなにがしかの人たらが大学の建物を封鎖し、門にバリケードを築いて、なかに人が入れないようにしていた。私は、直接的に学生運動に関わった訳ではなかったが、やはり社会や世の中のあり方に不満を持っていた。自分が大学で何のために学ぶのかを自問せざるを得ない状況があった。当時の私は、「学問は貧しい人々のためにあらねばならない。」などといつも理想ぶって考えていた。そしてその学問にとって「科学的」であることこそは、非常に重要なことだった。「科学的」な学問こそが貧しい人々を救う、と思い込んでいたからだ。もちろん、今でもそう思っている。だから当時、大学で聴いた講義も「科学的」であるかどうかに関心があった。『地理学概論』や『地誌学』など地理の方法論に関する講義もそのような耳で聴いていたし、当時読んだ地理関係の書物もそのような関心の中で読んでいた。もちろん、当時の私にとっての「科学的」な最たるものは、マルクスであり『資本論』だった。

さて、「地理的な見方や考え方」が登場した1989年の学習指導要領から、地理の教育目標に「日本人としての自覚と資質を養う」、ということが登場する。日本人には資質が問われるようになったのだ。逆に言うと、資質のないものは日本人ではない、ということになる。「日の丸と君が代」の学校での指導が強化されるのもこの指導要領からだ。折しも、この学習指導要領からは、高等学校の社会科は、地歴科と公民科に分けられた。ある保守的な歴史学者グループの、歴史や地理は社会科学ではないという主張に、時の政治勢力がのっかったのだ。高校の地理は、社会科ではなくなり、地歴科として、政治・経済など社会科学的な科目からは切り離されてしまったのだった。私には、学習指導要領は改訂を重ねるにつれ右傾化していっているようにみえる。

今、戦後史の流れのなかで、私の頭は次のように整理されつつある。私がかつて「科学的」がマルクスそのものであったように（今でも少なくとも半分はそうである。）、保守的な人たちにとっては、「科学的」はイコール左翼的であったのだ。1980年代に中曽根康弘氏の「戦後政治の総決算」が出てくるように、日本の保守化・右傾化が進む中で、左翼的な「科学的」は姿を消し、代わって「地理的な見方や考え方」と「日本人としての自覚と資質」が登場したのだ。もちろん「国旗・国歌」の義務化も登場した。今日（1999. 8. 9）、この原稿を書いている長崎原爆の記念日、日の丸・君が代を国旗・国歌とする法案が国会を通った。右傾化のスピードはますます加速している。「地理的な見方や考え方」と日本の右傾化を結びつけるのはナンセンス、おまえの勉強不足、と大学の先生方に非難されるだろう。まさか、地理的な見方や考え方が、かつての地政学と同じじゃあるまいし。いわゆる環境決定論でもあるまいし。

25年間の教員生活で私は、どのような教育をしてきたのか。実に情けない思いである。こんなに簡

単に「国旗・国歌法」が通ってしまうとは。私が最初に教壇に立った時の生徒はもう42歳で、世の中の中核になる世代である。まあ、自分が頑張れば、という思い上がりと、世の中よい方に向かうという、漠然たる楽観主義が根にあったのだろうと思う。教員一人の力なんていかほどのものにもならない。けど、それも仕方がない。しかし、これからの残された教員生活でも、私は決して「地理的な見方や考え方」などは分からないままだろう。私が求めるのは「科学的な見方や考え方」のみ。私の在学時、地理学教室のＹ教授の言われた言葉を思い出す。「村田君。地理であってもなかってもいいのです。あなたが今これをやりたいと思うこと、それをやったらいいのですよ。」。もう亡くなられたが、あえて「地理的」を押しつけられなかったこの先生を、私は尊敬している。

（昭和50年卒業）